昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十四年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二三八号）

慈光

第二十一巻　第三号

目次

絶対純一の信仰……近角常観……(1)
随感随想……和才誠司……(6)
一道会の記(二)……榊原徳草……(11)
如来より賜りたる信心……花田正夫……(16)

絶対純一の信仰

――一乘海と大信海――

近角常観

一

仏法の大海は茫洋（ぼうよう）として辺畔（きわほとり）を見ず、千浪万波、畳々として吾人のはかるところに非ず。仏界の義天は燦（さん）として星宿無数もとより人間思議の堺にあらず。故にいずれの経をひもとくも広漠、望洋の歎を発するのみにして、単純簡潔の要領を捕捉することすこぶる困難なり。

近時、青年の道を求むる者、仏教の信仰を得んと欲するも、その帰結するところに迷える、まことにそのところなり。然れども大海如何に無限なるも、その一滴の潮を味えば一瞬に四大海水の潮の味を知るべく、星宿いかに無数なるも、ことごとく太陽を中心として運行するものに非ずや。また如何なるところにこの天日を認むべきや、これ実に信仰問題の眼目なり。

天に二日なく、地に二王なきが如く、法界に二仏を認むべからず。もとよりその示現をいえば、千浪万波の如く、無数の星宿の如く、諸仏、菩薩の多き、実に恒沙塵数もただならず。しかれどもこれら諸仏は決して別々に存在するものにあらず、結局、平等是一にしてその道二三あることなし、畢竟一仏に統一せられ、一道に結帰せざるなし。その一仏とは、即ち阿弥陀仏、一道とは無碍の一道、誓願一仏乘なり。これ決して一家言にあらず、真実清浄なる絶対純一の大道にして、諸仏の出世ただこの唯一の道を知らしむるがためのみ。

それ如来の本願とは十方の衆生に対する仏陀の真実なり、慈愛なり、招喚なり。

我等、あらゆる生きとし生けるもの、無始以来、生死海

に流転して、無明の酒に酔い、三毒の夢を結ぶ、諸仏の大悲、唯我等をさまさんがためなり。如来の光明、唯この闇を破らんがためなり。しかしてこの大慈悲、大光明の根本これすなわち誓願一仏乘にあらずや。

華厳の仏も、涅槃の道も、二仏二道あることなし。この如来の十方衆生に対するや、平等にして善悪の区別をみとめず、修行の多少をかえりみず、罪悪の浅深にかかわらず、あだかも親の子に対するが如し、富めるものもこれを愛し、富まざるものもまたこれを愛す。貧しき者にいたりてはこれを愛すること一層はなはだしく、江湖に落魄するにいたりてはこを哀憫摂受したまうこととますますはなはだし。

ここにおいてや、如来の願心はむしろ、常没の凡愚、罪悪の衆生にあり。これ選択本願のおこるゆえんなり。即ち仏、布施をもって往生の業となさず、乃至、忍辱（にんにく）、精進、禅定、智慧、あるいは、塔像を起立し、沙門に飯食し、父母に孝養し、師長に奉仕する等、いずれも吾人の企ておよぶべからざる故に、唯念仏の一つを選択摂取して往生の業となしたまう。これ実に誓願一仏乘のおこるゆえんなり。

このごとくにして南無阿弥陀仏の一行に、一切の行をおさめ、またこの一法に、一切の法をおさむ。これ一行三昧のおこるゆえん、常行三昧の来る本源なり。

○十方三世の無量慧おなじく一如に乘じてぞ
　二智円満、道平等、摂化随縁不思議なり。
○弥陀の浄土に帰しぬれば、即ち諸仏に帰するなり
　一心をもちて一仏を、ほむるは無碍人をほむるなり。

曇鸞大師、十方仏国中、ひとり心を西方にとどめるゆえんにして、世俗の君子に答うるところ。道綽禅師その碑文を一瞥（いちべつ）してたちまち聖道門を捨てて浄土門に入りたるゆえん。また善導和尚の一心専念をすすむるものこの選択本願に順ずるのほかなく。法然上人はじめてその指導によりて往生の業、念仏為本の大獅子吼おこる。

親鸞聖人、その教行を信じていわく

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおおせをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

と、これ実に、誓願一仏乘を信受したまう聖人の御態度なり。

ここにおいてはじめて知る、一切諸仏の法、そもそも南無阿弥陀仏のほかなきなり。そもそも諸仏の世にあらわるるゆえんのもの、弥陀仏の第十七願の本意にしたがって、

十方恒沙の世界において、阿弥陀仏の威神功徳不可思議なるを讃歎するためならずや。

これ聖人が断言して、「三世の仏諸如来、出世の正しき本意、唯阿弥陀仏の不可思議の願を説かんとなり、」とのたまうゆえん。これ阿弥陀経に説くところの六方恒沙の諸仏の称讃功徳にして、釈尊一代の説法は、畢竟この誓願一仏乗を説きたるのほかなきなり。吾人はこの点においては、一代教中とくにこの一法を尊ぶのみにあらず、一代教そのまま含有的にみなこの誓願一仏乗を説くのほかなし。

華厳経に「文殊の法は常に爾（しか）なり、法王は唯一法なり。一切の無碍人、一道より生死を出でたまえり。一切諸仏、唯これ一法身なり、一心一智慧なり、力無畏もまたしかり」というも、念仏無碍の一道なり。

涅槃経に説いて「一道清浄にして二有ることなし」といい「云何んが菩薩、一実に信順するや。菩薩は一切衆生をして皆一道に帰せしむるを了知するなり」と云えるもまたこの本願の一道にあらずや。

ここにいたりてひそかに思う。親鸞聖人磯長（しなが）の聖徳太子の霊告をさずかりたまいし句にいわく「我が三尊、塵沙界を化す、日域は大乗相応の地なり」。聖人「行巻」に曰く「大乗は二乗、三乗あることなし。二乗三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗は即ち第一義乗なり、唯これ誓願一仏乗なり」と。ここにいたりて仏法の大海は、名号不思議の海水となりて、逆謗の屍骸をもとどめず、衆悪の万川、煩悩の衆流帰入して、功徳の潮、智慧の鹹に一味平等ならしむるにいたる。これ一乗海と名づくる所以なり。

聖人行巻に曰く「本願一乗海を案ずるに、円融、満足、極速、無碍、絶対、不二の教なり」と。かくの如くにして吾人は、絶対無限、純一清浄の一仏を見出すことを得たりと謂うべし。

二

すでにこの如き絶対不二の教を見出し得たり、尽十方無碍光の大悲大願を仰ぐを得たり。そもそも十方の衆生、何人かこの光照をこうむらざるものやある。またこの大願に救われざるものかある。

如来すでに十方の衆生を招喚したまう、一切の群生海、誰かこの如来の勅命にもるるものかある。世の苦悩多きものは益々この如来の矜哀をこうむるゆえんなり。世の罪悪重き者はいよいよこの大願の摂受をまぬかるべからさるなり。

如来は本願に誓って曰く「至心に信楽して我国に生れんに欲え」と。これ吾人、生死煩悩の間に流転して、清浄真実の心なく、歓喜愛楽の念もなく、発願廻向のくわだてなき

を憐みましまして、我等がためにそそぎたまう如来大悲のおこころなり。我等が不浄不実をみそなわして注ぎたまう如来の願心は、清浄なり、真実なり、欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲想、瞋想、害想をおこさず、少欲にして知足和顔にして愛語、麤言（そげん）を遠離して善語を修習したまう。これ如来永劫の間おこないたまうところにして、一念一刹那もこの清浄真実を離れたまいしことなし。

これ涅槃経に説きて、「一道清浄といい、如来は真実なり真実は仏性なり」というゆえんなり。

かくの如き清浄真実の仏心に接せば、吾人穢悪汚染の輩といえども、あに清浄たらざるを得んや、濁淤泥（こんじよくおでい）の中たちまちにして清浄の蓮華を生ず。いわんや、清浄真実の清泉あに我等が穢悪の心中を洗わざらんや。一度この清らかなる親心に接する、吾人知らず識らず合掌して、至心敬虔の念、忽然としておこる。

吾人の心、このごとく不浄なり、また不実なり、故に貪愛の波高く、瞋恚の炎さかんなり。濁浪滔々として何物をもけがさざることなく、瞋火炎々として亦何物をも焼かざるなし。この苦悩をみそなわして大慈大悲の哀愍をたれたまう。これ涅槃経に「大慈大悲を名けて仏性という」故に一切衆生悉く仏性ありとは、一切の衆生ついに定んで、この仏の大慈大悲をこうむるべきものなりとの謂（いい）にあらずや。また一切の衆生を悉く如来の一子として平等の慈悲をこうむるの謂にあらずや。一度この如来の大悲に接す、何人か信心歓喜の念に住せざらん、これ如来の心わが心に入れるなり。

華厳経に「信心歓喜のものは諸の如来に等し」といい、「信は道の元、功徳の母」というゆえんのものこれなり。この心もとより我等の起すところのものにあらず、如来平等の慈悲心なり。故に何人もこれに接するもの歓喜愛楽のこころをおこさざることなし。いかなる煩悩熾盛のものといえども、このごとき如来の満足大悲、円融無碍の御心にあいなば踊躍歓喜せざるものあらんや

かくの如く一念も我等おこす信心にあらず。ことごとくこれ如来の招喚によりて起さるるもの、一として如来大悲の廻向たらざるはなし。嗚呼本願一乗海は、全く清浄真実の仏心なり、その清浄真実とはすなわち一切衆生に対する大慈大悲なり。その大慈大悲は我等凡愚にむかって発願廻向したまうところなり。

聖人六字を釈して曰く、帰命というは本願招喚の勅命なり。発願廻向というは、如来すでに発願して衆生の行を廻施したまうの心なり。即是其行（そくぜごぎょう）という

は即ち選択本願これなり。必得往生（ひっとくおうじょう）というは不退の位にいたることを獲る事をあらわすなり。経には即得と言えり、釈には必定と云えり。即（そく）の字は願力を聞くによって、報土の真因決定する時尅（じこく）の極促（ごくそく）を光顯（こうせん）するなり。必（ひっ）の言は金剛心成就貌（かんばせ）なりと。

嗚呼これ誓願一仏乗の吾人が心中に宿りたまう大信海にあらずや。これいわゆる貴賤、緇素（しそ）をえらばず、男女老少をえらばず、造悪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず、十方衆生、一味平等にして、自力作善の人はその驕慢心をひるがえして信仰に入り、極悪深重の人も廻心懺悔して如来の大悲に泣く。この境にいたりて先師の信心と異ることなく、また弟子の信心と異ることなし。大願清浄の報土には品位階次（ひんいかいじ）を云わず、あだかもこれ四姓仏法に入りて釈氏と称するがごとし。真個にこれ仏教の真髄たる平等涅槃の境界を実現したるものにして、一切衆生悉く仏性有りの真意をあらわして、逆悪の阿闍世も遂に本願醍醐の妙薬によりて救済せらるるにいたれり。

嗚呼これ親鸞聖人が二十九歳、法然上人に遇いたまいし時、決定したまいし絶対不二の金剛不懐の信心なり。この信を得たる人はこれを真の仏弟子なり、真の菩薩なり。おそらくはこれ聖徳太子の霊告に「命終して速に清浄土に入る、善信、善信、真菩薩」と云うゆえんにあらずや。

浄土論に曰く、「仏の本願力を観ずるに、もう遇うて空しく過ぐる者なし、能く速に功徳の大宝海を満足せしむ」。また曰く「速に阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい）を成就せしむ」と。

しかして曇鸞大師、阿弥陀の本願力をもって、その速かなるゆえんを説明して、十八願、十一願、二十二願を宣揚したまいたること、実に浄土真実の渕源、教行信証の濫觴（らんしょう）にあらずや。

愚禿鈔に聖人自己の実験を披瀝して曰く。

真実信心は内因なり。摂取不捨は外縁なり。

本願を信受するは前念命終（ぜんねんめんみょうじゅうなり、即入正定聚の文。

即得往生は後念即生（ざねんそくしょう）なり。即時入必定の文、又名必定菩薩也の文。

他力金剛心なりとまさに知るべし。

便ち弥勒菩薩に同じ。

これ聖人が極言して、願作仏心、度衆生心、華竟平等心大悲心、是心作仏、是心是仏とのたまえる大信海にして、絶対不二、純一無雑の一心なり。（求道、五巻三号）

随感随想

年頭の所感

旧年末、福岡県護国神社より案内があり、歳末大祓式に参拝させて貰った。

大祓式は各神社とも、御神徳を感謝し、一年間の罪穢（つみけがれ）を祓い清め、新年を迎える重要な行事であるが、さて参拝してみると、参拝者はすくなく、極めて淋しき祭典であった。

一夜明けて元旦になれば、各神社とも怪我人を出すほどの多数参拝者にて賑わった。わずかに一夜の違いでかくも違いのあるものか。

歳末には神仏に感謝することを忘れ、新年には自己に都合よきことを神仏にお願いする。こんなことを訴えると、いかにも私が高い所に立って、いたずらに世間を批判しているようであるが、実は私が愚（おろか）で、自己反省の能力がない故、私の姿を写し出した鏡、私の姿を見せてもらったもの、他人のことでない、私自身の問題であると自省した。

和才誠司

権利は主張するが、義務は果たさぬ私
自分の自由は主張するが、他人の自由は尊重せぬ私
善いことはすべて自分のものにし、悪いことはすべて他人に押しつける私
成功したときは、己の力と誇り、失敗したときは、他人のせいなりと云い訳する私
他人には説法するが、自身は反省せぬ私
人にものを与えたときは、永く記憶し、貰ったときはすぐ忘れる私
夜床につき安眠すれば、ぐっすり寝込んで御恩を忘れ、眠れないと愚痴をかこつ私
このように挙げてくれば際限ないが、かかるわがままかってな、いかんともして見ようのない私には、私のこのわがままかっての欠点を、すべて知りつくし、この欠点ある

が故に、どこどこまでも見捨てたまわず、どこどこまでもお救い下さる、絶対のお慈悲、阿弥陀仏を仰ぐ以外に、解決の道はない。鉄には動く力はないが、磁石の吸引力によって、鉄が磁石に引きつけられる如く、私には力はないが、本願力廻向によって、仏より解決して下さる

唯本願を信じ、念仏申すばかり。

ちなみに、仏教誌上にて、神社参拝を語ることは、謹むべきであるが、現在の日常生活においては、何人も神社と関係を断つことができず、仏教にも神を尊敬せよ、と教えられてある。

私は唯仏のお慈悲一つに生かされ、神社信仰は持っていないが、靖国神社、護国神社は、私の先輩や戦友が合祀せられ、因縁深き神社である上に、福岡県動員学徒犠牲者援護の仕事をさせて貰い、県下多数の犠牲者、当時中学校生徒であった私の子供までも、靖国神社、護国神社に合祀せられてあり、私は神前にぬかずき、合掌し、唯南無阿弥陀仏と称えて、礼拝し、感謝するのみ。

道徳の限界

宗教と道徳の関係に就いては、いろいろと論議せられている大問題である。

一般に宗教は過去・現在・未来の三世にわたる人間根本の真実の教であり

道徳は人間が社会生活を営むようになってから、これを律するため便宜上、人が作った教であると云われてある。

道徳を説いた孔子は『いまだ生（生前のこと）を知らずいずくんぞ死（死後のこと）を知らんや』と語り、人間の生前には触れてないが『積善の家には余慶あり』と教えている。

孔子は『人』といわず『家』と云い、余慶は今生だけか来世にも及ぶかの問題がある。

宗教の中にも現世のみ説き、来世を語らぬものもある、この如きは真実の宗教でない。

かかる理論はしばらくさて措き、人生問題は人間一代の生涯だけで解決できぬ。何人もまぬかることのできぬ生死問題を考えても、因果の道理により、人間が突如として出現し、突如として消滅すると考えられぬ。死に直面した際道徳で解決できぬ。三世にわたる真実の教、即ち宗教によらざれば、死の影が絶えずつきまとい、道徳は行きずまり安心できない。

私の近くに中村花（八十七才）と云う未亡人が居住し、数十年来親しく交っている。中村さんは師範学校を卒業して小学校教師となり、二十一才のとき同じく師範学校出身の中村鉄造（当時二十三才）氏と、恋愛結婚をした。恋愛結

婚は現在は普通であるが、六十余年前の当時としては珍しく、しかも同一職場の教師仲間であったから、一時世間が騒いだ。

恋愛の勝利者、中村氏夫妻は、人のうらやむ睦しき家庭をつくり、教師としての業績も著しく、鉄造氏は学校長、視学、県社会教育主事等を停年まで勤め、退職後は大学講師として活躍した。氏は温厚篤実にして教育に特異の才能を持つのみならず、趣味、芸術に堪能にて、無器用の私が謡曲を始めたのも、氏のたまものである。

花さんは主人と共に教育に精励し、退職後、婦人会、社会福祉事業等に努力し、両人とも教育勅語に示された徳目を能く実行した理想的教育者夫婦として、広く一般から敬慕されている。

家庭においては多くの難問題があったが、能くこれを処理し、今日子供と孫総計四十七名の大家族に発展し、家計もまたゆたかである。

鉄造氏はすこぶる健康であったが、今から七年前、風邪の気味で就床し、かたわらにいた花子さんに『淋しいから一所に行こう』と云って、花さんの手を握った。花さんは便意を催したと思い『便器を持ってまいります』と云って立ちあがったが、意外にもこれが臨終で、そのまま永久に冥目したのである。

鉄造氏は最愛の妻と共に六十余年間、最善をつくし、希望に満ちた人生街道を、一意驀進したが、いよいよ臨終となり、力つき人生の極限に達し、妻の手を執り『淋しいから一所に行こう』と、真情をもらしたのであろう。

ここに人生の限界、道徳の限界を感ずる。生きている間は恋愛、家庭、職務、趣味等によって支えられているが、いよいよ幽冥境を異にするに至れば、たちまち総てを奪われ苦悩する、これが人生ではあるまいか。

花さんは主人の死後、家族の教養に、家政の整理に、社会奉仕に益々精励し、周囲の人に敬愛せられているが、多年苦楽をともにした夫に離れ、その淋しさを隠すことはできず、常に『死んで早く夫の許に行きたい』ともらし、家族は『おばあさん、お浄土には美しい若い女が多くいるそうだから、今頃おばあさんが行ったら、おじいさんは困るだろうから、おじいさん所に行くことは、断念しなさい』と慰めているが、花さんは、何人（なにびと）が何と云っても、死んで早く夫の許に行くという信念をかえぬ。夫婦の情として、まことにうるわしい限りであるが、ここに人間の力の限界、道徳の限界があるようだ。

大無量寿経に

「人、世間、愛欲の中に在りて、独り生じ独り死し独り去り独り来る。行くに当りて苦楽の地に至り趣く、身自

らこれに当る、代る者あることなし。善悪変化して殃福（おうふく）ところを異にす、宿予（あらかじめ）め厳待して、まさに独り趣入すべし。遠く他所に到りぬれば能く見る者なし。善悪自然にして行を追って生ずるところなり。窈々冥々（ようようみようみよう）として別離すること久しく長し。道路同じからざればあい見る期なし、甚だ難し、また相値うことを得んや」

と、説かれてある現実を、私は尊敬し、親しく交っている友人、中村氏夫妻を通じ、人間の力の限界を、身近かに強く感じ、人生の悩みは人の力にて解決出来ぬ現実を、私は疑わんとして疑うことができぬ。

人は自己の力の限界を知ることは困難であるが、何かの縁にふれ、自己の力の極限に到達し、自己の無智、無能、無力、無為に気づけば、歎異鈔第二条の

『親鸞におきては「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と、よきひとのおおせをこうむりて信ずるほかに、別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。そのゆえは自余の行をはげみても仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちてそうらわばこそ「すかされたてまつりて」という後悔もそうらわめ、いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』

と示されてあるように、自己のはからいを捨て、素直にお慈悲を仰ぐことができるであろう。

いよいよ我慢の刀折れ、はからいの矢玉尽きて、仏の軍門に降り、すべてを阿弥陀仏にまかせ、大悲の慈光に摂取せらるれば、歎異鈔第四条の

『慈悲に聖道浄土のかわりめあり、聖道の慈悲というはものをあわれみかなしみはぐくむなり。しかれども思うが如く、たすけ遂ぐることきわめてありがたし。また浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいうべきなり。今生いかにいとおしふびんとおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏もうすのみぞ末とおりたる大慈悲心にてそうろうべきと、云々』

と示されたように、念仏一つにて、いそぎ仏になりて大慈大悲をもて、別れた人の誰にでも、思うがごとくあえる世界のあることは、真にありがたき極みである。

遺詠

白川たに

（註）これは家妻が東京の榊教授の執刀で心臓の手術をうける前二、三年間の、病苦が一番はげしかった間の死を覚悟していた頃のものです　（白川栄誌す）

昭和二十四年四月

着ぶくれて迎え車に身を任せ一年八月の病床後、寺参り
吾子の押す車に乗りて親鸞忌

昭和二十五年十一月

今更に何をか言わん御仏の国に旅立つ我身なりせば
二、三年の寿命と覚悟して
時を経て命尽きなばもろともに弥陀のみもとで語り明かさん
弱き身を何時を何時とも知らざればつねに称えん弥陀の御名を

一人娘をおもうて

子には子の生きる道あり何事もまかせまつらん弥陀の御胸に

一人娘への母の叫び

人の世に生れしまことの生き甲斐は、法を聞き得て信ずるにあり

小康の日の陽だまり

暖かき縁に坐りて一人居れば栗の落葉の風に鳴るなり

入院の日に

入院のわが部屋の扉をふりかえり、ふりかえりつつ吾子かえり行く

昭和二十五年、娘十一才の時

入院の我を残して帰るより泊りたしとて吾子涙ぐむ

昭和二十六年四月、心臓悪し

生も死も弥陀にまかせてあるものを死をおもうときふと淋しかりけり

風前のいのちとおとみ

風にのりあそぶ落花をあおぎつつ我身ある日のいつあらんかと

昭和二十八年十月、手術の前に

弥陀たのむこころに変りはなけれども、日毎にうつるわが思いかな

○　数年前編者に送られしもの

うしろ戸を開けそばそこに梅の花

一道会の記（二）

榊原徳草

松本解雄先生は次ぎのように話されました。

「昨年と一昨年とはこの会に出られなかったのですが、三年振りに今日は学生諸君と共に参らせて頂いたのであります。

池山先生は甲南学校から京都の大谷大学へこられた時、私は京大の学生時代でありまして、花田先生も学生、今日見えておりませんが、その外に多数の学生が集まりましてあの寺町二条の鍵屋、当時の一寸した喫茶寮でありましたが、そこへ多分四月の何日かに先生をお招きして、歓迎の会を開き、お話を伺ったので、それ以来、約十年間、先生からお育てにあずかったのであります。

その間色々のお教えを受けたのでありますが、沢山ありますので略しますが、今ここに先生の御往生後三十余年を経過しまして、一つ思い出すことは、同じ教えを受けた、既に沖縄の戦線で戦死された林田さん、この奥さんの睦子さん、今の東山女子大で、元の女子専門学校に在学中、花田先生等のお導きで厚く信仰を喜はれた方でありますが、林田さんと結婚され、同一信仰の中で誠に有難い御家庭でしたが、妊娠中、子癇で亡くなられました。

御葬式の後、今の谷大のグランドの東の方の花山火葬場で、寒い時でしたが、火葬に附されたのですが、その時に生花はモーニングを着られて、あの烏丸通りに出られる所をジット立ちつくして見送っていられたあのお姿、あれは深く只今でも印象に残っているお姿であります、ハッキリと残っているのであります。

そのほか、私、日曜などに蓮華谷の先生のお宅に伺うと玄関に出てお迎え下さり、いつも大島の着物を召されて、あの帯を横に結んでいられるお姿、その外、講演の時のジェスチュアーなど目前に今も現れるのでありますが、今日ここに御出席の御長男の寿夫様のお咳をされる、あれが先生そっくりでありまして、ソク〳〵としてここに先生が居られる実感が致すのであります。

先程、寿夫様は、第二の母、友子奥さんのことを話されましたが、これも何かに書きましたが、あの当時、先生はご病気で、奥さんは西ノ宮の女学校の先生をしておられたのですが、本当に奥さんはよく先生につとめられました。

蓮華谷から京都駅まで五十分、その時分は急行がないので西ノ宮まで約二時間半はかかったでしょう。私は時々奥さんと車内で御一緒になることがありましたが、車中で洗面所に行かれて身づくろいをされる。お宅でそうした準備の暇がない、本当に大変なことであります。恐らくお帰りになる時は夕方も暗くなってからであったことと想像されます。丁度奥さんは、聖人に対する恵心尼公の姿、そういうように私はおもわれるのであります。

先程、榊原さんの何時もの通り歎異鈔の有難い拝誦がありましたが、第九章の「親鸞もこの不審ありつるに……」の「も」のこの一字でありますが、唯円房に聖人が仰言ったとき、恐らく唯円房の不審は解けてしまったのでないかと思うのであります。歎異鈔で聖人は「親鸞におきては……」と云われるとき、これは自信教人信の自信がありましょうか、又この「親鸞も……」と仰言られるときは、教人信でありましょうか、私そんなに思われるのであります。

池山先生は何時もあの第二章の「親鸞におきては云々」を「池山におきては」におき換えて、と仰言って「ジャア私も……ナム」と、また「阿弥陀仏」と申さない刹那に、光りの滝を浴びたように念仏が溢れ出てられた、と云われますが、何かこの「ジャア私も」のも共通の点があるように思うのであります。

話は違いますが、池山先生に何かおたずねすると、ああせよ、こうせよということは一つもありませんでした。先程榊原さんも申されましたが「ああそうですか」というようなお言葉なんですが、これは先生の口には出されませんが、聖人が末灯鈔の中で、繰返えし「とかくのはからいあるべからず候」と言っておられます。誓願名号同一の事の条には「ただ不思議と信じつるうえは、とかくの御はからいあるべからず候」「往生の業には私のはからいあるまじく候なり、あなかしこ〳〵。ただ如来にまかせまいらせおわしますべく候、あなかしこ〳〵」と教名御房宛に申されており「ただ不思議と信ぜさせたまい候いぬるうえは煩わしきはからいあるべからず候、……すべてこれなまじいなる御はからいと存じ候、仏智不思議と信ぜさせたまい候いなば、別に煩わしく免角の御はからいあるべからず候……ただ人々のとかく申し候わんことをば御不審あるべからず候ただ如来の誓願にまかせまいらせたまうべく候。とかくの御はからいあるべかずら候なり、あなかしこ〳〵」浄信御

房へ、とあります。

たった二枚ほどのところに「どかくのはからいあるべからず」と二つも三つも出ております。池山先生には、そういう言葉としては仰言らなかったが、「ああそう、南無阿阿弥陀仏」と仰言られる御姿の上に、今思いますと、毎日煩悩に明け暮れしておる私に、とかくのはからいあるべからず候と御姿の上に出ておったと、いよいよ思われてくる次第であります。

毎年こうして一道会が催され先生の御恩徳をしのぶことでありますが、しかし裏をかえせば忘恩の毎日でありまして聖人が「……師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」と仰言っておられますのに、宗団の今日はこの聖人の御心が何処にあるのか、と残念に思います、それと同時に、私にこの御恩報謝があるかと思いますと、ただ念々称名常懺悔より外にない身を思うのであります、なお色々申上げたいと思いますがこれで失礼します。

次に、久し振りでお顔をみせられた信国淳先生のお話がありました。

今お話にありましたように、池山先生は晩年に京都へお出でになられ、昭和四年から十三年まで、九ケ年間のお生活でありましたが、私も遇然に昭和四年に大学を出て大谷大学に俸職し、先生がやめられた十二年に私も退職しまして九州の故郷の自坊に帰っておりましたが、昭和三十三年に大谷専修学院に勤めまして今日に至っております。

専修学院と申しますのは、大学や高校を出た者で、寺院の住職になる者の学校であります。この学院に勤めることは、そのはじめに私が池山先生と出会いがあったから決定したものであります。

学院では、先生を憶い出しながら、歎異鈔を講義しております。毎年卒業の春に文集を出しており、その文集の名前を「出会い」と致しまして、卒業生の文を載せ、私も思い出を書いて来ました。今日は先生の前でその文を読ませて頂きます。題は「あまねく」であります。（以下朗読）

『学院では今、歎異鈔第九章の講話が続けられている。第九章というと私には、それと切り離せぬ或る一つの思い出がある。それは私がたまたま人の世に生れ、心から傾倒するしやわせをもつことのできた唯ひとりの師、故池山栄吉先生につながる思い出である。

私が先生の門をたたき、親しくお話を聞かせて貰うようになったのは、先生からすればもう晩年に属する時期のことである。そのために私は、すでに老齢に達せられ、とみに健康を損なわれたかと見られる頃の先生のお姿に接する

ことの方が多かった。洛西は蓮華谷の、京の街への展望のあんなに美しく開けたお住居に伺っても、先生は私をベッドの上に坐ったままで迎え入れられ、それからその日のご気分次第でおもむろに話を始められるといった具合であったのである。

そんな時私は、先生の背の近くに座を占めて、先生のお身体のあちこちにそっと手を当てながら、お話を聴聞したものである。というのが、恰もその頃私が、手のひら療治と称する一種の民間療法に興味をもち、臆面もなくそれを先生に試みようとしたからであって、それにまた、先生も先生で、そんな私の怪しげな療法を、もの好きにも、こころよく受け容れて下さっていたのである。思い出してみると、まことに可笑しなこともあったようで、或る時など、先生の心臓の在り場所をすっかり取り違えたまま手を当てていた。そのうちそのことに気がついて、思わず赤面し、狼狽せざるをえなかったが、しかしそんなときにも先生はいつに変らぬ涼しいお顔で、ああいい気持だった、と仰言られ、私の労をねぎらって下さるのであった。無事これ貴人という言葉があるが、先生こそ、その貴人だと、私はそんな先生を見るにつけても思うのだった。

そうした或る日のこと、先生は、その時たまたま手にしていられた書物のなかから「独文洽読」とある文字を指差されて、これ、何と読むんでしょうか？と私にきかれた。私が何気なく「コウドク」と読むんでないですか、と答えると、「洽」って、どういうことなんかなあ？と重ねて問いをかけてこられる。私はいささかあわてながら「アマネシ」と読むんと違いますか、この字は？と、やっとの思いで反答する。そしてそれに先生が何と云われることかと待っていると、やがて先生は、なるほど、アマネシでしたね本当に、と、口の中でつぶやくようにおっしゃられ、それから何か感に堪えぬような面持で、じっと虚空を見つめられるような風なのである……。

そしてその時フト私の気づいたことは、先生のその居間の壁面に色紙掛けが一つあって、その日はそれに、先生ご自身のあの美事な筆跡で「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」としたためられた真赤な色紙一枚がかかっていたということである。

事柄はそれだけである。それだけで私に、もう全く忘れられぬ思い出になっているのである。そしてそれだけのことが、私にとりそんなに深い、忘れられぬ思い出になっているというのは、いまのその、ほんのささやかな問いかけを通じて先生が、どんなに温かい教化の手を私に差しのべて下さっていたかということが、その後どうやら私にも判りかけてきたのである。私はその頃先生の導きにより、親

鸞聖人のみ教えに近づく機会を与えられ、聖人の云われるような信心の歓びに、自分ではすこし触れたように思っていた。そんなことで私は、当時心がよほど高ぶっていたのに相違なく、はたからのみる目にも、変に気負った、高慢ちきな、念仏者ぶった人間として映っていたであろうと思うのである。だからまたそんな私に、聖人のいわれる信心の道が、単なる個人の往く道でなく、却って「あまねくもろもろの衆生と共に」往かなければならぬ道だというようなことは、もとより判りようもないことであった。先生がいまいうような問いの形で私に与えて下さったご教化は、まさにそうした私への頂門の一針だったのに違いないと、今にして私にも、漸く思い知られることである。

「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」とは、云うでまもなく「かくごのときわれら」というものになり「かくのごときわれがため」として他力の悲願を受けとる者であってはじめて、心から叫び出すことのできる言葉である。そしてそのことは逆にいうと「かくのごときのわれらがため」ということの間――すなわち「普く諸々の衆生と共に」と云うことができ、事実もろもろの衆生と共に他力の悲願をうけとることのできる人間、そんな人間を私どもの内に、私どもの信心によって生み出し、創り出そうとするものこそ、実に他力の悲願にほかならぬということなのでなければならぬであろう。

当時私はいい気になり、わけもなく先生の御身体に手を当てていただけのことであったのだが、しかしそして当てた私の掌を通じ、先生から私にまで返され、伝えられてきたものは、尊くも温かい導きのお言葉であったのであり、そのようにして私に導きの言葉を与えて下さった先生は、すでにして「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」と深くも信知し、深くも叫び出される先生であったのであり、そんな先生が私の側に、私と同じ衆生として同座され、私と共にその悲願を「いよいよたのもしくおぼゆる」ものとして、いよいよ深くたのもうとされていたのであった。』

未　完

如来よりたまわりたる信心

花田正夫

歎異のこころ

歎異鈔は唯円房の晩年、親鸞聖人が亡くなられて三十年近い頃、念仏申される人々の間に、先師の口伝して下さった真信とことなったことが流布しているのを聞き、このままではその人達も可哀相であるが、更に後世に道を求める人々も種々と疑惑をもつであろうことを悲歎して、皆々一味の大信海に帰れかしとの切なる願いから、聖人から直々に聞きとった御物語をよすがとして、信心の異なる有様を明らかにし、ねんごろに導かれた書である。

そこで本鈔の前半は聖人の御物語りが誌され、十一条から十八条までに、当時の「信心ことなる」有様をあげて、それぞれに応病与薬の導きを述べてある。いわば前半は、顕正、後半は破邪である。これは大切なことで、我々は誰しも自分がよいと思うことをやっているので、それがたとえ間違っていても、間違いとは気付き難いものである。こうした時、正しいものを示されることによって、初めて自分の間違いも気付くことが出来る。これを「教を攬（と）って心を照らす」と昔からいわれるところである。

ここで特に注意しなければならぬことは、この歎異のこころは、善悪沙汰の裁きではない。異る者をいかぬと捨てるのではない、それが可愛相であると、何処々々までもお見捨てのない、悲心やるかたのないこころである。露命わずかに枯草の身にかかる老大徳唯円の「泣く泣く筆を染めず」におられぬところである。そこには当然はげしい、強いきびしい言葉も出るが、それは父が子をきびしく叱ることであって、決して冷たい裁きや非難や排斥ではない。

この鈔のいよいよ結び、総結文におよんで

「右条々は（十一章から十八章まで）みなもて信心の異るよりことおこりさうろうか」

と、その異義の病根を指摘して、先ず「信心相論」の問題を、かつて聖人からお聞きしたままに述べてある。

「故聖人の御物語に、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおゝかりけるなかに、同じ御信心の人もすくなくおわしけるにこそ。親鸞、御同朋の御なかにして、ご相論のこと候いけり。その故は、善信が信心も、聖人の御信心もひとつなりと仰せの候いければ、勢観房、念仏房なんど（聖信房など）申す御同朋達もてのほかにあらそいたまいて、いかでか聖人の御信心に、善信房の信心ひとつにはあるべきぞと候いければ、聖人の御智慧、才覚ひろくおわしますにひとつならんと申さばこそひがごとならめ、往生の信心においては全く異なることなし、ただひとつなりとご返答ありけれども、なおいかでかその義あらんという疑難ありければ、詮ずるところ聖人の御前にて、自他の是非を定むべきにて、この子細を申し上げれば、法然聖人の仰せには

『源空が信心も如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり、されば ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へはよもまいらせたまい候はじ』

と仰せ候いしかば、当時の一向専修の人々のなかにも、親鸞のご信心にひとつならぬことも候らんと覚え候。いずれも〳〵くりごとに候えども書きつけ候なり」

このことは、のちに聖人の御孫の如信上人からの伝授として三代目の覚如上人が御伝鈔の中にも述べていられる。そこには勢観房、念仏房の他に、聖信房もあげられているが、御伝鈔には法然聖人から親鸞聖人が正しく伝授していられる証拠として引用されている意図が見えて、本抄とはすこし趣きをことにしているように思われる。

さてまず、ここの場面を想像するのに、聖人は三十三四、勢観房は二十余、念仏房は四十頃と思われる。

親鸞聖人は三十三歳の御時、名を善信と改められた。さうして三十五歳の春、かの吉水の法難に際して越後に流罪となり、恩師法然聖人とは、生別がそのまんま死別となっていられるから、その頃と思われる。

年少の勢観房は、平重盛の孫で、十三の頃出家、法然聖人に常随して、戒律堅固で円頓戒の戒師を許されている。

聖信房は、天台や真言密教の学問をした人である。

年長の念仏房は、法然聖人の有名な大原問答の時には、聖人の反対側の人々にまじった人であるが、その時以来、篤く聖人に信服して、道心の深い、謹厳で謙譲な人であった。高田派の正統伝の中に、念仏房は聖人御滅後、信の上で忽然と不審が起り、煩悶のはてに、夢中に聖人の

「彼仏今現在成仏といえばすすむるぞかし。衆生称念すれば必ず往生を得るなり、何の疑いかある」

と仰せらるるを承って、やがて夢のうちに感涙とどめあえず驚いて目がさめ、それからは疑心も消えて往生せられた。この相論の時はまだ彼は未決定の時であった、そうした頃の念仏房の言葉として

「凡夫の信心はまことにすくなく、法然聖人の如くなる信を得て、おもんばかりなく往生を遂ぐべし」

と言ったとあるので、そうしたことがきっかけとなって、

「善信の信心も、御師匠の信心もひとつなり」

と親鸞聖人が覚えずつぶやかれたと思われる。

すると、あたりに沢山の御弟子方が居られたが、特に前の三人が「もっての外である。どうして善信ごとき者と、智徳ならぶもののない法然聖人と一つ信心だなどと云えようか。弟子の分際で潜越至極である」ときびしくつめよったのである。

聖人はこれに対して、おそらく笑顔をもって「誤解されてはこまる、自分の言うのは、御師匠の御智慧や学問のすぐれていられることは申すまでもないことであるが、往生の信心はすこしもかわりはない、ただひとつである」と所信のままを答えられたが相手方は一向に聞きいれないで

「そうまで云うのであれば直々にお師匠の裁断をうけよう」と、聖人は引き立てられて被告席につけられたと思う。

法然聖人は、ことの次第をよく聞きとられて、

「源空が信心も如来よりたまわった信心であるし、善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心であるから、ただ一つである。別の信心の人々は源空がまいるであろう浄土へは、とてもまいることはできまい」

と、こたえられたのである。一座の人々の驚きはどんなであったことか。確信していられたとはいえ、目のあたり御師匠からこの言葉をきかれた親鸞聖人の感悦は察するに余りがある。

これによって、信心の上においては、如何なる人間の持ち合せの智慧も、修得した学問も、また円満な学問も、持戒の力も、何の効力（はたらくちから）もなく、またそれと反対に、如何なる罪障の深重さも、本願の不思議な威力の前には、何の障りとならないことを、この問答を通じて具体的に、体験上に明らかに知らされることは、実にありがたい極みである。私共は抽象的、概念上では一応承知していても、具体的に、実際問題となると、信心ひとつ、とうなずくことはなか〳〵むつかしいことである。それは信のいたらぬ者ののがれ得ない大きな悲しみであるが、この聖人の御対度をとおして、疑雲は払い去られると信じる。

さてこの大切な、信心相論のことは、浄土宗系の書籍には何処にも見出せない。そして甚だしい人々は、これは真宗一派の者が、その正統性を根拠づけるために、わざと虚構をかまえて、世間に宣伝しようとの、ためにするものであると非難するけれども、唯円房が直々に聖人から聞きとられたものであり、聖人の人となりから、虚構を要とせられぬことは、明白な事である。

何はともあれ、私共はこの事例を鏡として、自分自身を深くかえりみなければならない。私共が遠い昔から迷いに迷いを続けてきた大きな原因の一つに、

「阿弥陀仏は、如何なる愚痴、十悪、五逆の者をもおたすけ下さることには、微塵の疑いもないが、そうはいうものの、矢っ張り、仏様は善くなってこそ、おたすけ下さるのであろう」

という疑心、へだてこころがひそんでいて、素直に仰せをいただけずに、疑怯退心をおこしてしりごみをする。それは外相（そとみ）は謙遜に似て、実はまだ大いに自分をたのみ力としているからである。

「他力の願行をひさしく身に保ちながら、よしなき自力の執心にほだされて、このたび空しくすぎなんこそ、かえすがえすも口惜しけれ」

と、いましめられるところである。

念仏房、勢観房、聖信房などは、こうした私共の、自力の執心を代表してくれる人々である。念仏房は道心を、勢観房は戒律を、聖信房は学問をたのみにしておるけれどもそれが御師匠、法然聖人の智徳に及ばないので、もっと立派になれたらと、内心に焦慮を持ち、疑雲に閉ざされていたことであろう。

もとより法然聖人は、愚痴、十悪の法然房、下品の劣機と常に仰せられているが、聖人は本当に賢く、徳高い方であるから、そのように仰言るので、大賈（おおきな商人）は蔵することむなしきが如し、の譬どおりで、吾々とは別である、というように、勝手に憶測して、そのために信心もはかばかしく決定し得なかっと思われる。

真面目に仏道を聞く人が、一番辛苦するのは、この自力の執心である。沢木興道禅師は「仏法とは行きつくところへ行きついた人生を教える宗教である……」と警告せられ、曽我量深師は「二種深信の不徹底による」と指適せられているが、もとより仰言る通りである。

親鸞聖人は「いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と、力とすべき智慧もなく、たのむべき修行もなし得ない、虚仮不実、蛇蝎奸詐（たかつかんさ）にして悪性さらにやめがたき身、たすかるよすがの絶えはてた身と告白されている。

法然聖人はまた「経典を披（ひらん）するに、わが智ひるがえってくらく、行法を修習するに、わが機すべておよびがたし云々」と表白され、両聖はぴったりその歩調が合っていられる。

そこに、かかる浅間しき身をかねて御照覧下されて、ことに憐みたまい、たすけ遂げようと選びに選んで成就して下された選択本願の念仏を聞信せられるにおよんで

「余が如きの下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔、かねて定めおかるるおや」

と高声に唱えて、法然聖人は念仏の一門に入られ、親鸞聖人はまた法然聖人のお導きをうけて

「他力の悲願はかくの如き（煩悩具足にしていずれの行にても生死を離るることあるべからざる身）のわれらがためなりけり」と信受せられたのであった。かくて両聖は全く一味の信海に浮ばれたのである。

親鸞聖人が「まことなるかなや、摂取不捨の真言、超世稀有の正法、聞思して遅慮することなかれ」と、切々お勧め下さるのも、わが機相（きざま）ばかりを眺めて、広大無辺の如来の思召し、御本願を聞き流しにすることのないようにとの大悲のお叫びである。

釈尊の御晩年、王舎城に大悲劇がおこって、阿闍世王は父を殺し、母を幽閉したのであるが、のちにわが愛児の可愛さから、己が父王を殺害した罪の重さに気づき、やがて大煩悶におち、かかる悪人は必堕地獄で、誰一人として味方する者は居ないと、ふるえおののき、食事も喉を通らなくなった。時にギバ大臣は「大王を救うて下さるのは、釈迦如来を除いて外にありません、さあ参りましょう」と勧めたけれども、「めっそうな、尊い仏のもとに、こんな極重悪人が近づこうものなら、大地が裂けて、地獄におちる」と、悪をおそれて、かたく心を閉じ、震えあがっていよいよ苦しむという始末であった。

ギバ大臣はさらに、実例をあげ、仏陀は、九百九十九人殺害した脂曼外道をも救われ、愚者ハントクも、下賤の生れの尼提ももれなくすくわれている。どうして大王を捨てられようか。大王はすでに懺悔の心がある、それで救われないはずがない、仏は恰も七人の子があっても親はそのなかで、重病の子のために苦労するように、苦悩の有情をすてられることはない、と懇切にすすめ、又亡き父ビンバシヤラ王の声なき声に導かれて、仏前にまうで、そこに仏陀の広大無辺な慈心は、微塵のおへだてもなく、苦悶の心の底までを全理解して下さり飽くまでもお見捨てのないみ心から「大王に罪あらば、仏も亦罪あり、共に地獄におつべ

し云々」とまで告げられ、遂に仏心の御真実にとろかされて、慚愧と歓喜の人と転じて、生涯仏法の大外護者となった。

これは、罪悪を怖れて苦しみ、へだて心から孤独の苦におちた者への救いをあげ、罪悪もおすくいの上にさわりとならぬことを知らせて下さる先達とし手本とさせて頂いた。

又二月号に載せさせて頂いたように、白井成允先生は、近角常観先生に東大で研究生活の間、三・四年間も、聞法していられたが、もう一つどうしても聞き足らぬところがあって、それに腐心された挙句、とうとう持てあまされて、先生の前に打ちあけられ

「自分の不真面目なためにどうしても信じられません」と申されたとき、先生はねんごろに、しかもきびしく

「真面目になったら救うて下さるのではなしに、真面目になろうとしても、どうにも真面目になれぬ者を、その切ないやるせない心をお察し下さって、何処までも捨てぬぞとの本願である……」

とお聞きして、真面目になれる、なろうと思っていたのは驕慢心であった。このどうにも真面目になれぬ、不真面目より外にない自分をお目当の大悲と知らされ、それからというものは不真面目が見えれば見えるにつけ、いよいよ如来の御苦労の深さを仰ぐようになったと仰言る。愚考いたしますのに、不真面目と自分を別に分けて、その不真面目さに困りはててていられたとき、その不真面目こそ自分の本性であった、それ以外に自分はなかったと信知されると共に、それとはなれたまわぬ本願の大悲の光を身にうけられたのである。

さて、親殺しの阿闍世と、真摯（しんし）な青年学徒であられた白井先生とを、時代もことなるのにならべるのに奇異の感を持たれようが、私としては、阿闍世の悪業も仏慈の前にはさわりとならず、むしろそのことを憐んで下さる本願に救われ、真摯な白井先生の力も、往生のためには何の効力もなく、全く無力であって、その駄目なものをたのみ力にする愚者をこそ、ことに憐みたまう本願と聞かれて真実の安心をせられたのであるが、ここに悪凡夫も、善凡夫も、身にもつ善悪はたすけにもさわりにもならぬ、両者とも全く無力な者故に建立して下さる本願のひとりばたらきに、善悪の凡夫、老少、智愚、貧富のへだてなくおたすけを頂く、それ以外に、生死の闇の晴れる道のたえてないこと、言葉をかえて言えば「如来よりたまわる信心」以外に、たすかる道のないことを知らされると共に、晩年円熟の法然聖人も本願のひとり働きにたすけられ、煩悩熾盛

の青年僧、善信房もまたその興盛な煩悩もさまたげとならない本願ひとつに安住せられる、そこに「さればただひとつなり」との仰せが光るのである。

嗚呼、両聖人は、善悪の両凡夫を代表されて、そこにもれなく一切衆生が一味の信界に入らせて頂けることを、我御身にかけてお知らせ下さるのである。

最後に、近角常観先生からおききしたことを書きそえて結びとしよう。

常音先生は第四高等学校を中退せられ、三十歳近くまで求道会館で、兄君の常観先生の御教えを続けておききになり、はじめの頃は、自分も信仰を得て、兄のように立派な生活をしようと願っていられたが、ほどなく、そのことはまことに我身勝手な願いで、自分の名利の煩悩を満足さすために仏法を利用していた、大間違いだったと気づかれ、唯々聞く一つとなられた。

しかし、いくら聞いても〳〵わからぬのでついに自暴自棄におちて、「自分はいくら聞いてもわからない。元来出来そこないの、やくざの性に生れたもので、信心などはいただけぬもの」と自分で自分の心を閉じ、へだてていられた。

そうしたある日、兄嫁にあたられるキソ子夫人から茶のみ話として

「あなたの兄さんは、弟を子供の時から育ててきたが、そのことでどうということもないが、あれの我慢のやまぬのは困ったものだ、可哀相なものだと、愚痴のように云われている」

と聞かされた。常音先生はそれを聞かれて、はじめは面白くなかった。というのも、兄は信心がある、自分は駄目な人間であるから、兄の言うとおり、命これ従う、という状態で、兄に我慢を出したことはない。それなのに、我慢がやまぬとは、兄も勝手なことを云うものだ、という風であった。しかし待てよ、物の値段は相手がきめるのが順序で自分ではよいと思っても、兄の目にはそう映ったので、これはやむをえないことだ。

それにしても「兄が愚痴のように、あれが困ったものだ可哀相なものだと、云うのは、これは何時も自分のことを気にかけていてくれておればこそである。世間一般であればそんな我慢のやまぬ奴は仕方がない、出て行けと云うのが普通であるのに！」と思いいたられた時、その心がそのまた聖人のみこころであり、弥陀大悲の思召しであると感得され、「ありがたいな」と念仏の人となられた。

そのことを常観先生に告げられなかった、というのもそれまでに、度々信心がわかったようなことを云って、何時も崩れていたので、黙っていられた。

そうした或日のこと「常音、お前何かよいことがあったのか」と常観先生から聞かれて、はじめて事の次第を有態に打ち明けられると、「これから前席をはじめるように」と云われて、すこしずつ講話もはじめられた。ところが、何時の間にか、我心得たりの慢心におちて、人々と折り合いが悪くなり、そのことを苦にされて

「兄は立派な信仰生活をしているが、できそこないの性の自分には、かえって会館に住んで信仰の邪魔となる。むしろ性にあった玩具屋を何処かの街ではじめようか」と言って、そのことを可成りの決心をもって兄にとうとう打明け

「なあんだ、そんなことで苦しんでいたのか。わかったといってはまたやりそこない、わかったというてはまたやりそこなう、それだからお呆れのないお慈悲じゃないか！」

とのおこたえに、

「可成り意気ごんだ心も、青菜に塩とくだけた。そして現にやりそこなっている自分の胸に、その言葉が鉄鉋玉のように命中した。それらかはやりそこないのない信心などはあり得ない、ただこのやりそこないのやまぬ者を何処々々までもお見捨てのないお慈悲一つでやらせてもらっている」

それからは

と語られた。同時に今一つは

「長い間それでも、兄は立派である、自分は駄目なやりそこないだ、という思いがあって、兄を別人あつかいしていたが、或る時、兄があんなによろこぶのは欲の深い煩悩がさかんなからであると、知れて、矢っ張りそうか兄もこの煩悩をもてあまして、その者をお見捨てのない御本願のまことをよろこばして頂いていたのか、とわかり、自分も自分で始末のつかぬ煩悩具足の身をお見捨てのない大悲にすくわれるばかりである。して見れば、兄の信心も、お見捨てのない大悲、自分の信心も、お呆れのない本願、まったくひとつであった」

と感銘深く語られて、

「それからは兄貴が別人でなくなった。」

と同一信心の味いを述べられた。これこそ、法然、親鸞両聖の信心一つの仰せを、身をもってあかしして下さった、徹底したお体験であり、それによって私共の信の上に大きなお導きとさせて頂いている。

おもうに、善悪の二業は、煩悩具足の我等にとっては、いずれも縛り綱にすぎない。常観先生は「善煩悩が金の鎖なら悪煩悩は鉄の鎖である。金と鉄の差はあっても身心をしばって不自由な身とさせられることには変りはない」と

碑

よく仰言っていられた。

我々は善煩悩の幻影を追うて、はてしない迷いの林に入っていよ〳〵身を苦しめているが、歎異鈔に

「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらせばこそ他力にては候え」

とも、歎異鈔第一章に

「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々」

とも、歎異鈔七章に

「罪悪も業報をかんずることあたわず、諸善もおよぶことなき故に、無碍の一道なり……」

と切々として呼びかけていて下さる。

俳人一茶は、六十すぎて

ともかくも　あなたまかせの　年の暮

と句作している。これは依頼心をもととしたなげやりではなく、ともかくも、とは、善も悪も、生も死も、その一切あげて如何ともする力のない身を自省して、本願のひとりばたらきに身をまかせた心境である。

おわり

「一日暮し」

正受老人

いかほどの苦しみにても、今日一日と思えば堪え易し。楽しみもまた今日一日と思えばふけることもあるまじ。親に孝養せぬも長いと思うゆえなり。一日、一日と思えば理窟はあるまじ。

一日、一日とつもれば、百年も千年もつとめ易し。

一生と思うからに大そうなり。一生とは長いことと思えども、後のことやら知る人あるまじ。死を限りと思えば一生にはたされ易し。

一大事というは、今日只今のこころなり。それをおろそかにして翌日あることなし。凡ての人に遠きことを思えば謀ることあれど「的面の今」失うに心つかず。

○

「ひと日ひと日」

吉野秀雄

ひと日ひと日大切に生きむと気づきしは足萎(あしなえ)へし三年前よりのこと

一生はただ刻々の移りなり、刻々をこそ老いて知りつれ

わがいのちやがて尽きなむさりながらゆるがせにせじよ。

その消ゆる日まで

あとがき

野に山に春はきました。良寛師は

　鶯のこえを聞きつるあしたより
　　春の心になりにけるかな

　鶯のたえてこの世になかりせば
　　春の心はいかにあらまし

と詠んでおりますが、今の場所に私共が移り住んで十九年、はじめは鶯の初音に心洗われる日も多くありましたが、ここ数年来、とんと鶯が来なくなり、人の世の移り変りをきびしく知らされます。良寛師はまた

　何ごとも移りのみ行く世の中に
　　花は昔の春にかわらず
　悔の花老が心を慰めよ
　　昔の友は今あらなくに

とも詠んでいますけど、空気の汚染のためにその花もいじけたものとなりましょう。特に香りのよい金木犀も銀木犀も、こちらでは花をつけなくなりました。やがては人間全体も繁殖力を失い、自らの作った公害に亡びるまではいかなくても、恐ろしい結果が来ることでしょう。おそるべし、用心すべし。

○

去る一月一日、大阪の鶯信者、大字佐平治さんが、やすらかに往生せられました。近角先生が関西方面に旅せられると、影の形にそうように、どんなお忙しい時でもお伴していられました。常音先生が「大字さんは丁寧親切居士だよ」と冗談に云われた程でした。背椎調整器を御自分で考案されて、生涯その道一筋を貫ぬかれてたずきとせられました。昨年は、四国の琴平や高松で酒見先生と共に、信の生活を続けられた長岡鶴吉翁も亡くなられましたが、大字さんとは格別に御昵懇で、肝胆あい照らす仲であったので、長岡さんの訃をどんなにかいたまれましたことでしょうか。

今や御二人共に宝林壇上にかえられて、倶会一処のよろこびの中から、残る私共を慈憫下さっていることでしょう。

明日の夜は照りますものと知りながら
　入るさの月の惜しくもあるかな

と古歌がまたくちずさまれます。

御案内

○毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。一道会例会。
　市電、新郊通り一丁目。東入ル三筋目左入ル二軒目。
○毎月二十四日、午前、午後。市内昭和区小桜町、教西寺法話会。
　市電、市バス、御器所通り。桜花学園の東。

慈光第二十一巻第三号　昭和四十四年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　二百五十円（送共）
　　一年　五百円（送共）
編集・発行人　花田正夫
　名古屋市南区駅上町二ノ八八
　電話八二一局七〇三七番
印刷人　吉野穂志郎
　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
発行所　慈光社
　名古屋市南区駅上町二ノ八八
振替口座名古屋一〇四七〇番